

論考

なぜわれわれは中・韓・独三言語連携プロジェクトを続けるのか  
—複言語主義の中で「連携」の意義を考える—

Why do we carry on with a three-language collaborative project?:  
The significance of language collaboration in plurilingualism

西 香織 NISHI Kaori<sup>1</sup>

阪堂 千津子 HANDO Chizuko<sup>2</sup>

池谷 尚美 IKEYA Naomi<sup>3</sup>

要旨

我々はこれまで複数回、異なる大学の中国語・韓国語・ドイツ語クラス間で連携プロジェクトを実施してきた。本稿では、プロジェクトにおいて教師間、学生間、学生と母語話者間、そして社会との「連携」の重要性や、なぜこの時代に「つながる」ことやその方法を考えることが重要なのかを複言語主義の観点から示した。本稿で取り上げた 2018 年度プロジェクトでは、「外国人の日本に対する違和感」をテーマに実施したが、プロジェクト終了後に参加学生を対象に行ったアンケートの自由回答を分析した結果、参加学生の多くが自文化を客観視し、多様な文化を理解し、且つそれぞれへの批判的な視点を獲得し、多様な文化との「摩擦」に折り合いをつけながら共生をしていく必要があることへの気づきがあった。この結果から、連携プロジェクトを通じて学習者の多文化共生社会に参加する素地を培うことができ、ステレオタイプ的な文化理解から脱却できたと考えられる。

キーワード:

複文化教育、プロジェクトワーク、連携(つながり)、多文化共生

Abstract

This paper presents the results of one of our joint projects and demonstrates from a plurilingual perspective (1) the importance of collaboration between teachers, students, native speakers (Chinese, Korean and German), and society, and (2) why we need to consider the significance of ‘connection’ today. The theme of the project conducted in 2018 was “Foreigners’ discomfort with Japan.” Analysis of the post-intervention questionnaires revealed that many participants objectively and critically observed their own culture and the diverse target cultures. It also became

<sup>1</sup> 所属: 明治学院大学 Meiji Gakuin University

<sup>2</sup> 所属: 武蔵大学 Musashi University

<sup>3</sup> 所属: 横浜市立大学 Yokohama City University

clear that they were aware of the need to come to terms with ‘friction’ in order to live symbiotically in a diverse culture. Our finding suggests that this project helped the learners to develop a foundation for participating in a multicultural society and to dissolve their stereotyped cultural understanding.

**Keywords:**

**plurilingual education, project work, collaboration, plurilingual symbiosis**

### 1. プロジェクトの基盤としての「めやす」と先行研究

執筆者3名は2013年度よりこれまで計7回にわたり、日本の異なる大学の異なる外国語(中国語・韓国語・ドイツ語)クラス間で連携プロジェクトを毎回、テーマを変えて実施してきた。執筆者らは「外国語の学習を通して、他者を発見し、自己を発見し、自他の理解を深めながら関係性を築き、協働社会を創ることをめざす」という『外国語学習のめやす』の教育理念(公益財団法人国際文化フォーラム編 2013:17)を共有し、それを緩やかに援用しながらプロジェクトワークを実施している。これからの多文化共生社会を生きるためには、外国語学習の中で言語・文化・グローバル社会領域の分野を視野に入れ、教室外の人とつながり、さまざまな人々と関係性を構築することが総合的コミュニケーション力を育成するうえで有効だと考えるからである。

執筆者らが実践している連携プロジェクトが、既に報告されている交流学习の例と異なる点は、次の2点である。

- ①複数の言語クラスが協働して行う「複文化の学び」であること
- ②異なる大学だけではなく、さらに、「異なる言語クラス」を連携させていること

異なる学校のクラスをICTを使って連携させて協働学習を行う形態は、「学校間交流学习」に位置づけられる。学校間交流学习自体は2000年代から注目されるようになり、さまざまな授業実践がすでに報告されている<sup>4</sup>。2010年代になると、大学の国際化・グローバル化もさらに進み、目標言語圏にある海外の協定校と日本の大学の教室をつなげる国際交流学习<sup>5</sup>や、近年では「国際共修」<sup>6</sup>という教育的アプローチを用

<sup>4</sup> 稲垣ほか(2004)では多様な授業実践が報告されている。

<sup>5</sup> 一例として、澤邊(2019)では、韓国の大学で学ぶ日本語学習者と、日本国内の日本語教員養成課程の学習者を繋いだプロジェクトワークの報告がなされている。

<sup>6</sup> 末松は「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流(meaningful interaction)を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ(考察・行動力)やコミ

いて異文化間理解を促進する事例も報告されている。そこでは、さまざまな国や地域出身の留学生と日本人学生とが同じクラスで学び合うが、国際共修は留学生を対象とする日本語教育の分野から派生しているため、その際に使われる言語としては英語または日本語、あるいはその両方であることが多く、英語以外の外国語を活用した実践例は、平松ほか(2021)をのぞき、ほとんどないのが現状である。

一方で、複言語主義に基づく「言語への目覚め活動」のように、学習者が複数言語を同時に学び、言語の多様性への「気づき」を高め、多様性に関わられた態度を育成することを目指す授業例も既に報告され始めている(岩坂・吉村 2015、大山 2016 など)。しかし、これまでに報告されている事例では、言語と文化の多様性に関して得た「気づき」を学習者が教室外の他者に発信したり、教室外の学習者から学ぶような場面はあまり見られない。

執筆者らが行っているプロジェクトワークでは、各テーマに関する調査を各言語クラスで実施し、調査時に目標言語圏の学生やネイティブスピーカーに協力を仰いだり、インタビューをしたりするなどの活動が行われている。こうして各言語の学習者が自らの学習言語を使って得た情報や知識を他の言語クラスの学習者と共有し、さらに、その結果をもとに目標言語圏に関する再調査を行ったり、その結果についての考察を互いに行っている。このように、複数の文化に関する学び合いを発動させることが執筆者らの目的であり、本プロジェクトは目標言語圏との国際交流学習をベースにしたうえで、さらに異なる大学の言語クラスを連携させた複文化の交流学习の場となる。

交流学习で教師が育成のねらいとする力は、土井ほか(2002)によれば、(A)コミュニケーション能力育成、(B)他地域・異文化理解の育成、(C)学習を追求する意欲の育成、(D)情報リテラシー育成、(E)協同作業する力の育成、の5つに分類される。本稿では、この中でも、主に(A)、(B)、(E)(本稿では「協働」)に着目し、第2章ではプロジェクトの概要を説明したうえで、第3章では、第5回プロジェクトをもとに、異文化と自文化その他に対する「気づき」がどのように生じたかという点について事後アンケート等を用いて明らかにする。第4章ではさらに、協働作業と「連携」の意義、目標言語の学習者として知り得た情報を他言語学習者へ伝える、「使用者」「仲介者」としての言語使用の意義や各プロジェクトワーク実施後の振り返りの重要性について論ずる。

---

コミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする」と定義している(末松ほか 2019: iii)。

## 2. 中・韓・独 3 言語連携プロジェクト

## 2.1 プロジェクトの概要

以下、これまでに実施したプロジェクトについて簡単に紹介する(表 1)。

表 1 これまでに実施したプロジェクトと概要

	年度	言語	中国語				韓国語				ドイツ語			
		実施大学	KS 大学/MG 大学 <sup>7</sup>				M 大学				YS 大学			
	大テーマ	専攻 二外	必修 選択	テー マ数	履修 人数	専攻 二外	必修 選択	テー マ数	履修 人数	専攻 二外	必修 選択	テー マ数	履修 人数	
1	2013	大学生の消費行動比較	専	必	5	17	二	必	5	23	二	選	4	7
学費・住居・食費・アルバイト・携帯電話(スマホ)料金の 5 テーマにまつわる価格と学生の消費行動について、各目標言語の話者に調査し、結果を比較、考察(スライド作成、プレゼン)														
2	2014	古今音楽比較	専	必	4	15	二	必	4	20	二	選	2	8
長く歌い継がれている歌、人気のある歌、思い出の歌など、チームごとに歌詞の解説、歌の背景・出来事を調査、分析(学生たちで歌ったミュージックビデオ作成、プレゼン)														
3	2015	街角ワード・ウォッチング	専	必	5	20	二	必	3	21	二	選	1	
街中でみられる目標言語による標識や店、大学構内の標示などを調べ、外国人にとって必要でわかりやすい標識・標示を考察(スライド作成、プレゼン)														
4	2017	平昌冬季オリンピック調査	専	必	4	18	二	必	5	29	二	選	1	4
平昌オリンピックという様々な国が関わるスポーツイベントを軸に、目標言語圏の選手について調査したり、オリンピックに伴う問題点を調査・分析(スライド作成、プレゼン)														
5	2018	ここが気になる NIPPON	専	必	4	20	二	必	4	19	二	選	3	
各目標言語文化圏の話者に対して、日本に対する「違和感」をインタビューし、各文化圏との習慣、価値観、社会システム等の違いなどを調査・分析(スライド作成、プレゼン)														
6	2019	オリンピック訪日客のための『転ばぬ先のツエ』	二	選/必	5	27	二	必	8	38	二	選	2	
東京オリンピックの外国人訪日客のために、日本での困り事に焦点を当てて調査し、日本で快適に過ごしてもらうための日本の文化や習慣システムや役立つ日本語を紹介(対訳日本語表現集を作成、プレゼン)														
7	2020	コロナ禍の学生生活	二	選/必	3	8	二	必	6	24	—			
コロナ禍で各目標言語圏の大学生がどのような学生生活を送っているのかを比較考察。コロナ禍での大学生活を楽しく有意義に過ごせる効果的な対処法などを提案(スライド・Instagramなどで作成、プレゼン)														

<sup>7</sup> 2013 年度から 2018 年度までは KS 大学で、2019 年度以降は MG 大学で実施。

このうち、2017 年度プロジェクトの KS 大学を中心とした、アクティブ・ラーニングに対する学習者の態度については西・李(2018)に、2018 年度プロジェクトの YS 大学を中心とした、学習者の意識の変化や「気づき」については池谷(2021)に詳しい。また、執筆者 3 名による口頭報告としては、西ほか(2015)で 2014 年度プロジェクトを、阪堂ほか(2016)で 2015 年度プロジェクトを、池谷ほか(2018)で 2017 年度プロジェクトを扱い、さらに、西ほか(2019)においては 2018 年度プロジェクトを、阪堂ほか(2019)においては 2017 年度と 2018 年度プロジェクトの比較の中で多文化共生社会への参加について考察し、そして、池谷ほか(2020)においては 2018 年度と 2019 年度プロジェクトをもとに「英語以外の外国語を学ぶ意義とその実践」について考察している。

## 2.2 クラスごとのアダプテーションの例

表 1 にあるように、この 3 言語クラス間にはカリキュラムやシラバスはもちろん、専攻・非専攻(第二外国語)の違い、開講コマ数の違い(あるいはプロジェクトワークに割ける時間量の違い)、履修者数の違い、など、さまざまな違いが存在する。そのため、プロジェクトの進め方を無理に統一するのではなく、それぞれのクラスの実情に合わせて柔軟に適應させていく必要が生じる。そこで、ここからは第 5 回プロジェクト「ココが気になる NIPPON」(2018 年度)を例にとり、各言語クラスの実施状況及びアダプテーションの方法を紹介する。

本プロジェクトでは、日本(の各地域)と、中国語・韓国語・ドイツ語各言語文化圏の文化の違いに焦点を当て、自文化および異文化への「気づき」を促す仕組みを考えた。各言語文化圏との習慣や価値観、社会システム等の違いから自文化を客観視し、異文化への「偏見」や「先入観」の存在に気づき、文化間で折り合いをつけて共生する必要性を認識させることを目的としたものである。実施に当たっては、次の 3 つの到達目標を設定した<sup>9</sup>。

- ① 自文化を客観視し、多様な文化を理解し、且つそれぞれへの批判的な視点を獲得する。
- ② 自己の中にある異文化に対するステレオタイプと偏見の存在を認識する。

<sup>8</sup> ここで言う「気づき」とは、異質な文化との接触により異質な文化を持つ他者との付き合い方を考えさせるだけでなく、学習者が帰属している文化の価値観を内省させることも含んでいる。

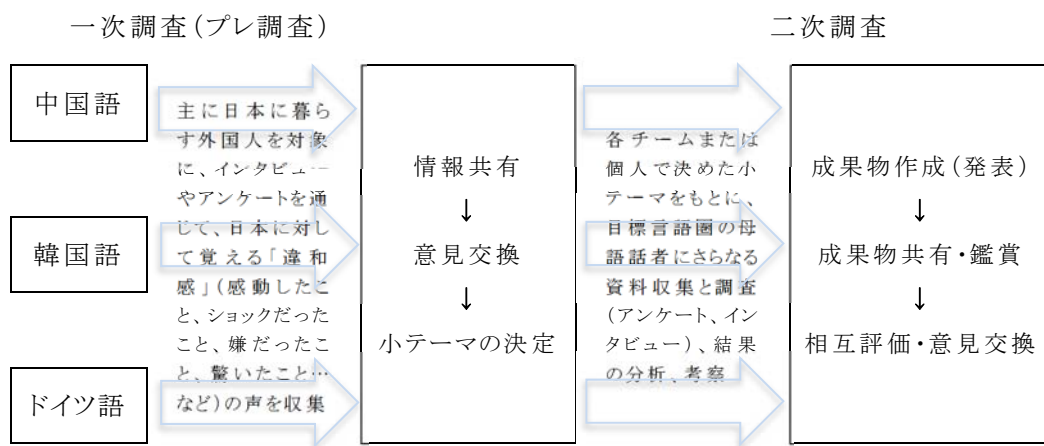
<sup>9</sup> 教師による意図的な誘導を避け、学習者自身の「気づき」を促すために、学習者にはあえて本到達目標を明示しなかった。

③多様な文化的背景を持つ他者との接触の中で生まれる「摩擦」に折り合いをつけながら共生をしていく必要があることに気づく。

実施時期は2018年10月から2019年1月で、中国語クラス(KS 大学外国語学部中国学科1年生20名)は4チーム4テーマ、韓国語クラス(M 大学社会学部1年生19名)は4チーム4テーマ、ドイツ語クラス(YS 大学国際総合科学部1年生3名)は3個人3テーマであった。時間割の配置の違いから、授業時間内でのクラス間の直接的な交流はできないため、やりとりは主にWEB(サイボウズ Live<sup>10</sup>を利用)上で行った。

本プロジェクトワークは一次調査と二次調査に分かれる。一次調査では目標言語圏の人たちが日本に来て「違和感」を抱いたことを中心に聞き取り、その結果をWEB上に書きこみ、全体で意見交換を行った。その結果を受け、調査テーマを各クラスで決定し、二次調査では目標言語圏の母語話者にインタビューやアンケートを実施したり、文献調査を行った上で、テーマに関するスライドを作成し、クラス内発表を行った。その様子やスライドもWEB上で共有・鑑賞し、相互評価や意見交換を行った。以下の図1はその調査の流れを示したものである。

図1 各言語クラスの調査の流れ



全体として共通の大テーマと枠組みは設定するが、各言語クラス各々の授業の実情に合わせて適宜アレンジしながらプロジェクトワークを実施した。そうすることで異なる

<sup>10</sup> サイボウズ株式会社が提供するグループウェア(2019年4月15日で無料版サービスを終了)。

るクラス・異なる言語でも連携が可能になる。このようなアダプテーションのバリエーションは、同じコンセプトで多様な授業展開ができることの可能性を示している。

### 2.3 チーム内の協働作業とクラス間の連携の具体例

各言語の母語話者へのインタビューやアンケート調査、目標言語で書かれた関連文献の閲読、成果物の作成、クラス内の発表などにおいて目標言語を使用するため、学習者は初級段階でありながら、その言語の「使用者」「仲介者」になっている。つまり、他の言語クラスの学習者が通常、知りえない情報を、言葉と文化を融合させながら日本語に訳して提供することで、「情報の発信と仲介」という真の意味での情報伝達を行っている。同時に、同様のテーマでそれぞれがプロジェクトワークを実施していることから、目標言語文化圏とは異なる情報を他言語クラスから得られるため、まさに「一石三鳥」の学習効果が得られるしくみである。

表 2 各チーム・個人の二次調査内容(小テーマ)

中国語	マナー	言語習慣	食文化	決済システム
韓国語	生活文化	学校生活(教育)	食文化	決済システム&マナー
ドイツ語	マナー	学校生活(教育)	外国人との共生	

表 2 では、一次調査の結果を受けて、二次調査で各クラスで取り組んだ小テーマを示している。各言語クラスのメンバーで話し合い、さらに、WEB 上で 3 言語クラス間でも議論を重ね、互いに情報を提供しながらテーマを絞っていくため、3 言語クラス間で二次調査の内容は必ずしもまったく同じにはならない。ただし、他の言語クラスにも必ずコメントを投稿することとし、特に二次調査で自分たちのクラスが扱っていない話題については、情報の相互補完ができるように努めさせた。実際の投稿のうち、中国語クラスの「決済システム」を例にとると、単なる日中間の比較や現金か電子マネーのどちらがよいか、という話で終わらせず、日中の社会システムの違いに言及したうえで、日本の決済システムは今後どのように変わっていくか、という見通しなども示した内容となっている。成果物の鑑賞後、他言語の学習者から、東京のアルバイトでの実体験やドイツの決済システムの紹介がコメントの形で返されたり、中国語圏の人に対する見方や考えが変わった、というコメントも見られたりした。

### 3. 第 5 回プロジェクト実施後のアンケート結果と考察

本章では引き続き、2018 年度に行った第 5 回プロジェクト実施後のアンケート結果を見ながら考察をしていく。

#### 3.1 到達目標の達成度確認

まず、教師が定めた3つの到達目標の達成度について、学習者の自由記述コメントから該当するコメントを抽出し、その達成度を確認した。

- ①自文化を客観視し、多様な文化を理解し、且つそれぞれへの批判的な視点を獲得する。 100%
- ②自己の中にある異文化に対するステレオタイプと偏見の存在を認識する。 28.9%
- ③多様な文化的背景を持つ他者との接触の中で生まれる「摩擦」に折り合いをつけながら共生をしていく必要があることに気づく。 65.8%(15.8%)

①については、いわゆる Byram (1997) の「批判的文化アウェアネス (Critical Cultural Awareness)」を意識した目標設定であるが、これについては学習者全員から何らかの言及があったため、期待通りの成果が得られたといえる。また、③については、50%の学習者は「できれば相手の文化を受け入れる」「相手の文化を尊重する」という所までの言及にとどまるが、さらに 15.8%の学習者には、より積極的な共生・社会参加についての言及が見られる。その他、WEB 上でのコメント記載内容(記名式)を合わせると②③の割合はもっと高い。ただし、各学習者のこれまでの異文化との接触には個人差があり、どこまで深く踏み込めるかには程度差がみられる。

#### 3.2 アンケート結果

本プロジェクトについて、互いの成果物(発表動画)鑑賞後、相互評価・意見交換を経て、各言語クラスでアンケートを実施した。以下はその一部の結果である。アンケートには、3 クラス計 42 名が回答した。以下に示す 1~9 の各項目については、「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の 3 件法で自分の考えに近いものを選択するよう指示し、さらに各項目には自由記述欄を設け、回答の理由も併せて記入させた。以下は各項目に対して「そう思う」を選択した割合である。

- 1. 履修中の言語の文化や習慣に以前よりも関心を持ち、もっと知りたいと思った。 92.1%
- 2. 履修中以外の言語の文化や習慣に以前よりも関心を持ち、もっと知りたいと思った。 76.3%



3. 異なる文化背景を持つ人々に対する意識やイメージが変わった。 50.0%
4. 自分の文化や習慣に対する意識やイメージが変わった。 52.6%
5. 今回のプロジェクトは、大学生たるにふさわしい高度な思考力と協働力をを用いた知的な活動だと思う。 68.4%
6. 今回のプロジェクトを「語学学習」の一形態だと思う。 63.2%
7. 履修中の言語の学習が進んだと感じる。 55.3%
8. 履修中の言語に以前よりも関心を持ち、もっと勉強してみたいと思う。 84.2%
9. 履修中以外の言語に以前よりも関心を持った。 52.6%

アンケート結果で興味深いことは、履修中の言語の「文化や習慣」に以前よりも関心を持ち、もっと知りたい(項目 1)、履修中の「言語」に以前よりも関心を持ち、もっと勉強してみたい(項目 8)と思ったと回答した割合がそれぞれ 92.1%、84.2%と非常に高い割合を示したことである。特に項目 1 に対して「そう思う」の理由として<sup>11</sup>、

- ・私は中国語を履修しているのに、全く中国のことを知らないと思い、もっと知らないといけないと思った。(中)
- ・文化を知れたので実際に韓国に行ってその文化の実際について知りたい。(韓)などのコメントがあった。項目 8 については、
- ・自然な表現はこっち、というのを韓国人に教えてもらったので、そういうことをもっと知りたいと思った。(韓)
- ・その文化について知るにはその国の言語を使って質問したり調べたりするのが良いと思った。(独)

などのコメントがみられた。目標言語圏の文化に関しても、母語話者との協働や、自ら調査した経験が現実的な学びとなって、目標言語の学習意欲向上につながっていることがうかがえる。

履修中以外の「文化や習慣」や「言語」に関して以前より関心を持つようになったかどうかは(項目 2、項目 9)については、それぞれ「そう思う」と回答した割合が 76.3%、52.6%と、やはり高い割合を示している。項目 2 では、

- ・日本と韓国だけでなくその他の国の文化を知ることによって似ている点や違う点を多く比べることができるので、その他の国についても興味を持った。(韓)

---

<sup>11</sup> 本稿で引用する学習者の自由記述コメントは、紙幅の関係上、一部を抜粋したり、文体を統一するなど、若干の調整を行っている。

・いままで中国や韓国について興味は持っていたが、この研究成果発表がなければ知ることもなかった文化やその国の特徴がたくさんあった。(独)

などのコメントがあった。項目 9 については、

- ・プロジェクトを通して他国に興味を持つことが多くなり、学んでみたくなった。(韓)
- ・他大学チームが流暢に諸言語を話しているのを見て自分も中国語・韓国語を話せるようになりたいと思った。(独)

などのように、各言語クラスの発表が刺激となり、履修中以外の言語や文化を学んでみようという意欲につながっていることが判明した。

異なる文化背景を持つ人々に対する意識やイメージの変化(項目 3)、自文化の意識やイメージに対する変化(項目 4)についてはそれぞれ 50.0%、52.6%が肯定する結果が出ている。数ヶ月間のプロジェクトワークで約半数の学習者が異文化・自文化に対して意識の変化を認めているのは、決して低い数字ではない。項目 3、4 では、

- ・今まで日本における当たり前しか知らなかったので他の国の人について色々思うことがあったが、このプロジェクトを通してその国ごとの文化や当たり前を知ること、他の国の人に対する意識の持ち方が変わった。(韓)
- ・自分の文化や習慣が普通だと思っていたが、他の国と比べると良いところもあるし、悪いところもあるので良いところは他の国の人にも知ってもらいたいと思うし、悪いところは他の国の文化や習慣を尊重していくべき。(韓)

というコメントがあった。「そう思う」と回答した学習者の中では、異文化を知ること、自文化への内省も行われていたことが分かる。

### 3.3 自由記述コメントから読み取れる学習者の「気づき」

アンケートにおける学習者の自由記述コメントの特徴として次の3点が挙げられる。

#### ①自文化についての「気づき」

- ・私たちが抱く他国への違和感には気が付きやすいが、相手国からみた日本への違和感には意外と気づかないものだった。(中)
- ・定型表現ばかり使って会話をする日本人に対して、外国人は違和感を覚えることがあることが分かった。(独)

#### ②異文化についての「気づき」

- ・中国人の良さを多く発見し、日本人の持つステレオタイプを少し払拭できた。(中)
- ・外国人に対する固定観念がその人のイメージまで作ってしまうのではないか。(独)

#### ③多文化共生社会についての「気づき」

- ・違和感を違和感のままにせず、その理由や背景を知ろうとしたり、時には受け入れようとする姿勢も大切。(韓)
  - ・まずは異文化と触れ合う、関わりを持つことが大事。偏見を持たず、深く関わりあい、体感してこそ多文化共生社会への参加の第一歩が踏み出せるのでは。(中)
  - ・外国人にとっても日本人にとっても自文化が「当たり前」であり、だからこそ意識的にお互いの文化を互いに尊重しないとすれ違いが起きるのではないか。(独)
  - ・文化相対主義に立つ。「相手の文化を受け入れる」ということは不可能だと感じるので、できるだけ相手に寄り添い尊重していけたらと思う。(中)
  - ・自分の違和感について、違和感を覚えない外国人と意見をすり合わせる。(中)
- このように、まずは異文化を「知る」、「受け入れる」、「先入観・偏見を持たない」、「自分の価値観を押し付けない」、異文化を「尊重する」、「大切にする」、日本に住んでいる外国人に「手を差し伸べる」、「寄り添う」、両者が「歩み寄り」、異文化の人と「すり合わせる」、「折り合いをつける」などのコメントが多くみられた。

### 3.4 異文化感受性発達モデルとの対応

コメントなどから学習者自らが多くの発見をしていることが分かるが、これを「異文化感受性発達モデル(The Developmental Model of Intercultural Sensitivity: DMIS)」と照らし合わせると、個人差はあるものの、文化相対的段階の「違いの受容」までは進んでいるものと考えられる。

表 3 異文化感受性発達モデル

自文化中心的段階			文化相対的段階		
違いの否定	違いからの防御	違いの最少化	違いの受容	違いへの適応	違いとの統合
分 離 絶	逆 転 優 越 侮 蔑	超 越 的 普 遍 性 身 体 的 普 遍 性	価 値 の 違 い 尊 重 行 動 の 違 い 尊 重	多 元 主 義 共 感	建 設 的 マ ー ジ ナ リ テ イ 文 脈 上 の 評 価

参考:山本・丹野(2002:27) Milton Bennett 1993 年より作成

本プロジェクトの成果としては、学習者のほとんどが、自文化を客観視し、多様な

文化を理解し、かつ、それぞれへの批判的な視点を獲得して(あるいは、少なくともその必要性に気づき)、本活動を通じて多文化共生社会に参加する素地を培うことができたことが挙げられる。また、学習者の多くが、異なる言語クラスとの「連携」を肯定的に評価している。その理由として、「連携」によって自文化や異文化に対する理解がさらに深まり、自らの考えや価値観をダイナミックに発展・変換させることができたためであると思われる。実際、学習者間の意見のすり合わせの中で「新しい価値観を獲得した」というコメントもみられた。

そもそも「連携」するには相互の行動様式や価値観の違いを尊重し理解する姿勢が何よりも重要である。協働作業は学習者同士の違いも受容することが求められるため、目標言語圏の価値観はもとより、教室内外の多様な他者(異文化)に対する「気づき」が要求されることから、このようなプロジェクトは異文化感受性を促進するのに効果がある。それこそ我々がプロジェクトで協働作業を重視する所以である。

異文化感受性を促進するに当たって、このようなプロジェクトの流れは、一見すると固定観念やステレオタイプを逆に助長するような懸念もないわけではない。ネット上では国民性を過剰に一般化したり興味本位で紹介されていたりするため、それらの情報をそのまま引用して作業を進めることには、ステレオタイプを助長させるリスクも確かにあった。しかし、実はその**過程こそが重要**であると考える。本プロジェクトでは、互いに成果物を披露し、コメントをすることで、異なる地域・異なる大学・異なる言語学習者間でのやりとり自体が、ある意味では異文化交流ともなり、自らの持つ価値観などを振り返る大きなきっかけとなった。つまり、複言語プロジェクトでの言語文化比較を通して、自分が持つ固定観念に学習者自身が気づくことで、最終的にはある特定の文化圏の事柄に対する固定観念の助長を回避することにつながったように思われる。アンケート結果からも、自らの固定観念や、世間一般に言われているステレオタイプの発想に疑問を呈する内容のコメントが多くを占め、全員ではないものの、ステレオタイプ的な文化理解からの脱却が見てとれる。

・中国人はマナーが悪いという声もよく聞くが、それは日本人目線で日本のマナーの尺度で計っているものであり、中国のマナー、日本のマナーを具体的に比較し、**どういう感覚の違いがあるのか調べるのはとても意味がありそうだと思う。**(韓)というコメントのように、学習者には明示していなかった本プロジェクトの到達目標を的確に見抜いている学習者もいた。

## 4. 考察

### 4.1 協働作業と「連携」の意義

中川・岩井(2020:116)では、「【成果物共有型】と【協働的交流型】は、交流相手と課題を遂行していくため学習プロセスにおいて葛藤や衝突も起こりやすいが、それを乗り越えるための深い対話が生まれる」と述べられている。一方で、執筆者らが実践してきたプロジェクトは【協働的交流型】に分類されうるものであり、チーム間・言語クラス間における協働作業を通して、さまざまな葛藤や衝突を乗り越えた結果としてのより深く掘り下げた考察が生まれる。特に発表および互いの成果物鑑賞後の議論は、想定以上の効果を生み出すこともある。

- ・発表して終わりではなく、互いに発表を見てまた議論が深まっていくのがとても良かった。(韓)
- ・他大学の方と意見を言い合い、発展させることができたと思う。(独)
- ・発表そのものより、その準備段階や他のグループ、他の大学のプロジェクトを通してより多くを考えた。(韓)

というコメントからも、学習者自身が、プロジェクトワークの過程はもちろん、発表後の議論にも意義を見出している様子が見える。

また、WEB 上で学習者同士が頻繁にコメントのやりとりしたことが「発表を見てもらった」という実感に繋がり、喜びを感じたという声もあった。テーマと目標言語・文化の「連携」、学習者同士の「連携」に重点を置いて遂行した結果、それらの相乗効果により、学習者の学習モチベーションの向上につながったように思われる。

- ・ドイツや中国の発表を見て、他の国の文化も自分で調査してみたくなった。(韓)

以上のようなコメントからも、「連携」を通じて、さらに複文化的な視点が生まれ、その他の言語文化へと興味・関心が広がっていていることがわかる。

また、教師間の「連携」も欠かせない。プロジェクトを意義あるものにするためには、教師間で綿密な打ち合わせや頻繁な連絡、そして学習者の発表や意見交換を行えるよう時間調整が必要で、そのためには献身的な協力が不可欠である。互いの理念やカリキュラムなど、大学の事情をよく理解しあった上で、意見調整や妥協点を見出す作業が絶えず行われる。大学生らしい高度思考力を伴う発表や成果物にするために、プロジェクト実施前の話し合いに始まり、実施中も教員間でやりとりを重ね、実施後には、実践報告も兼ねて反省を行い、次のテーマについて話し合いを行う。単独授業に比べ、このような作業は時間的制約を伴い、時として負担になるが、プロジェクトの設計やワークをより多角的な視点から行うことが可能となり、それらを通し、教師自

身にも「気づき」が生まれ、「教師自身の成長」という副産物を手に入れることができるのである。

#### 4.2 情報発信者・仲介者としての言語使用の意義

同じ言語を学ぶクラス間ではなく、なぜ異なる言語クラス間でプロジェクトを実施したのか。それは、単なる目標言語の「学習者」としてではなく、その言語の「使用者」「仲介者」として、他者に自分たちの得た情報を提供するという役割を担ってもらいたかったからであり、かつ、そのような活動を通じて、自文化や目標言語圏の文化以外の他文化についても理解を深めることが可能になると考えたからである。同じ言語の学習者同士では、学習言語使用の熟達度を比較して競争意識を生む恐れがあり、自分たちが調査した結果を「相手は既に知っているのでは」と考え、コメントを躊躇するような状況が考えられる。しかし、異なる言語の学習者同士では、それぞれが目標言語圏の事情について、他の言語学習者へ自らが知り得たことを紹介する真の情報伝達・共有の場となり、それが各言語の学習者の「使用者としての自信」にもつながりうる。学習者のコメントにも、

- ・学んだ語学で違う語学を専攻している人に伝えるのがふさわしいと思った。(韓)
- ・お互いの言語や文化を知らず、また自分たちと同じ言語を学習中の初心者同士でやるよりもプラスになると思った。(韓)

という記述が見られるように、「使用者」あるいは「仲介者」としての役割が初級の学習段階であっても、学習者の自信につながる可能性が見てとれる。

#### 4.3 振り返りの重要性

各言語クラス間で各自の成果物を鑑賞した後、互いにコメントをしあったその意義はすでに述べた。しかし、そのプロジェクトワークをさらに深い学びとして位置づけようとするならば、実施後の総括(振り返り)が不可欠である。各プロジェクトワークの最後には「気づき」を促すためにアンケートを実施していたが、アンケートの結果を学習者と共有することも非常に重要であり、振り返り作業によってさらなる「学び」と新たな「気づき」が生まれる。振り返りの時間を授業中に確保することができるかどうかは、その時のクラスの事情により変わってくるが、振り返りの時間を十分に取れた後の学習者のコメントはより深くなっているように思われる。たとえば、第5回プロジェクト実施(成果物鑑賞)直後のアンケートにおける自由記述コメントの内容と、総括後の自由記述コメントの内容では、同じ学習者でも記述内容の深みが大きく異なっている。

- ・最後の「総括」が最も意義ある授業だと感じた。どう頑張っても偏見や考え方を变えるには文化的背景からも難しいことが多々ある。しかし、それをどう受け入れ、折り合いをつけるかが大切なのだと気づいた。この考え方を知っているかどうかで、実際に多文化と触れ合った時の対処の仕方も変わってくると思う。(中)

プロジェクトワーク実施直後には自身のチームの成果物に対する評価が自己満足のようにになっていたものが、他チームとの比較や総括によって議論を深めていく中で、「もっとこういうことができたのではないか」という、次のステップにつながる前向きなコメントが多くみられるようになったことは振り返りの重要性を示唆している。

## 5. おわりに

以上、学習者の肯定的なコメントを中心に、我々の行っているプロジェクトの意義を述べてきたが、協働作業が苦手な学習者をどのようにチームに参加させるか、文法・発音重視ではなく実践重視のプロジェクトを「語学学習」の一形態とみなさない学習者をどのようにプロジェクトに動員していくか、など、実際には、我々が解決すべき問題も数多く存在する。それらの解決には、学習者にプロジェクトの意義を十分に理解して活動に参加してもらえよう、より丁寧な説明や事前の綿密な「しくみ」作りと丁寧な「振り返り」が不可欠である。そしてそれには強固な三連携——目標言語・文化とプロジェクトワークとの「連携」、学習者同士の「連携」、教師間の「連携」——が要求されることは言うまでもない。このような綿密な計画は大変な労力を伴うが、教師個人で複言語授業を行う数倍もの効果を上げることができる。真の複言語主義の理念とは、こうした連携を通して学習者自らの「気づき」が生み出されてこそ、教師間・学習者間で共有されるものではないだろうか。

## 引用文献

Byram, M. (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters Ltd.

土井大輔・松本有・稲垣忠・黒上晴夫(2002)「教師のねらいと活動タイプからみた共同学習の分析」『日本教育工学会大会講演論文集』18, 577-578.

阪堂千津子・西香織・池谷尚美(2016)『『街角外国語ワード・ウォッチング』プロジェクト紹介』2016年1月10日, 外国語授業実践フォーラム第11回会合・福岡韓国朝鮮語教育研究会1月度研究会・中国語教育学会第5回研究会合同会合(九州産業大学).

阪堂千津子・西香織・池谷尚美(2019)「多言語連繋型プロジェクトワーク授業のデザイナーオリンピックを題材にした授業デザインの考察」2019年3月10日, 朝鮮語教

- 育学会第 80 回例会(近畿大学東大阪キャンパス).
- 平松尚子・鈴木綾乃・速水淑子(2021)「国内学生と留学生が多言語で共に学ぶプロジェクトの試行と課題」『横浜市立大学論叢』(72).255-268.
- 池谷尚美(2021)「ICT を使った多言語文化比較プロジェクトにおける、学習者の気づきについて」5-33, 齋藤公輔・田原憲和・池谷尚美編著, 『「気づき」を促進するプロジェクト授業の実践と考察—ドイツ語教育の現場から—』大阪公立大学共同出版会.
- 池谷尚美・阪堂千津子・西香織(2018)「平昌オリンピックで目標言語圏の選手を応援しよう! ~韓・中・独 3 言語プロジェクト~」2018 年 3 月 4 日, 言語教育エキスポ 2018 (早稲田大学).
- 池谷尚美・阪堂千津子・西香織(2020)「外国語教育の新しい形を求めて—英語以外の外国語を学ぶ意義と、その実践について考える」2020 年 4 月 26 日, 言語文化教育研究学会第 66 回例会(オンライン).
- 稲垣忠・黒上晴夫・中川一史(2004)『学校間交流学习をはじめよう—ネットの出会いが学びを変える』三晃書房.
- 岩坂泰子・吉村雅仁(2015)「『言語意識』と『多様性に対する寛容な態度』の育成に向けたことばの教育—奈良教育大学附属小学校における『言語・文化』授業」『次世代教員養成センター研究紀要』(1).101-106.
- 公益財団法人国際文化フォーラム編(2013)『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム.
- 中川正臣・岩井朝乃(2020)「日韓交流学习の動向と課題」『城西国際大学紀要』28(2), 107-120.
- 西香織・阪堂千津子・池谷尚美(2015)「中・韓・独音楽比較プロジェクト」2015 年 3 月 15 日, 言語教育エキスポ 2015(早稲田大学).
- 西香織・阪堂千津子・池谷尚美(2019)「『違和感』から始める多言語・多文化連繫プロジェクト多文化共生社会への参加に向けて—」2019 年 3 月 2 日, 第 17 回外国語授業実践フォーラム(立命館大学東京キャンパス).
- 西香織・李大年(2018)「プロジェクト学習を通じた学生のアクティブラーニングに対する意識調査」, 『北九州市立大学外国語学部紀要』147, 19-47.
- 大山万容(2016)『言語への目覚め活動 複言語主義に基づく教授法』くろしお出版.
- 澤邊裕子(2019)「第 15 章 日本語教員養成における『めやす』」296-313, 田原憲和編著, 『他者とつながる外国語学習をめざして—「外国語学習のめやす」の導入と活用』三修社.
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子(2019)『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.
- 山本志都・丹野大(2002)「『異文化感受性発達尺度(The Intercultural Development Inventory)』の日本人に対する適用性の検討——日本語版作成を視野に入れて」『青森公立大学紀要』7(2), 24-42.